

2010（平成22）年度
三重県教育委員会委託事業（実践研究事業）

豊かな人権教育の創造をめざして

～外国人の人権に係わる問題を解決するための教育～

教職員実践事例資料

目次

I 作成にあたって.....	2
II 学びのナビゲーション（若い世代へのメッセージ）	3
III 実践事例を通して	
事例① 【津市立千里ヶ丘小学校の実践】	6
事例② 【松阪市立殿町中学校の実践】	7
事例③ 【県立上野農業高等学校の実践】	8
事例④ 【松阪市初期適応支援教室「いっぽ」の取組】	9
IV 教職員のスキルを高める5つのステップ	10
V 寄せられる質問から	12

I 作成にあたって

～明日からの豊かな実践創造に向けて～

2009（平成21）年10月、文部科学省は、「人権教育の推進に関する取組状況の調査結果」を公表しました。報告書は、「人権教育の充実が、児童生徒の学力の向上、民主的な学校・学級づくり、隠れたカリキュラム（例えば、いじめを許さないといったり、人権を尊重する児童生徒の関係や場の雰囲気等）の再構築といった、今日的な教育課題の解決にも資するものである」とし、人権教育の一層の充実を求めています。

また、三重県教育委員会は、2010（平成22）年3月、「三重県人権教育基本方針」（以下、「基本方針」）にもとづく実践を進める際の指標として、指導上の観点や、取組のポイントを具体的に記載した、「人権教育ガイドライン」を発行しています。

「基本方針」を具現化し、人権教育をさらに推進していくためには、私たち自身が日々の実践を振り返り、悩みや葛藤、子どもたちの成長をまとめ、互いに学び合いながら実践力を高めることが重要です。

本冊子では、「基本方針」が掲げる「個別的な人権問題に対する取組」の中にある、「外国人の人権に係わる問題を解決するための教育」の実践事例を取り上げ、実践者による学びのプロセスを具体的にまとめました。

人権問題の解決を自分の課題としてとらえ、状況を変えようとする具体的な行動に結びつく教育の充実を図るため、「人権教育ガイドライン」などと併せて、明日からの自分（自校）の豊かな実践創造に向けて、ご活用いただければ幸いです。

Ⅱ 学びのナビゲーション（若い世代へのメッセージ）

ちがいを豊かさに ～多文化共生社会をめざして～

在日コリアンの子どもたちと

～親と子どもの思いや現実を知ることから～

在日コリアンであることを、子どもたちが言いたくても言えない状況があります。そのことによって、彼らの思いや、その置かれている現状がわかりにくくなっている現実があります。

しかし実際には在日コリアンであることで、辛いことに出会っている子どもたちがいます。また、差別を無くして行ってほしいと思っても、どうすればいいのか分からず、そっとして欲しいと思わざるをえない保護者の現実があります。

私たちは、まず子どもを理解するための一歩として、そのような現実を自ら知ろうとすることが大切です。家庭訪問等を通して、子どもや保護者のくらしの事実を知り、そこにある教育課題を明らかにしていく必要があります。



人権教育ガイドラインの中でも、外国人を取り巻く現状について述べられています。

～正しい歴史観を身につけ、国際的な人権感覚を～

「在日」問題について、偏った認識によって誤った見方をしてしまったたり、無関心であったりする人も少なくありません。在日コリアンが日本で暮らすことになった歴史的経緯等について学ぶことは、「在日」問題を理解していく上で大切です。

学習に取り組むことを通して、正しい歴史観を身につけ、国際的な人権感覚を培うことが大切です。



人権教育ガイドラインでは、「外国人の人権に関する知的理解を深める授業づくり」という項目の中で述べられています。

～「ちがっていてあたりまえ」をあたりまえに～

これまでの取組から、制度上の差別は以前よりも無くなってきています。しかし、「異質」なものを排除しようとする意識は、私たちの社会にまだまだ残っています。

子どもたちが、異文化に触れることによって、文化の差異に対して偏った先入観や違和感をもつのではなく、違いを楽しむことのできる豊かな情操を育てていくことが大切です。

さらに、このような豊かな学習体験を、子どもたちがなかまに伝え、ひろげていくことが必要です。そして、その取組を学級だけの取組で終わらせるのではなく、系統立てた学校全体の取組、さらには地域全体の取組として位置づけていく必要があります。



人権教育ガイドラインでは、「多文化共生の人権感覚を育てる授業づくり」「自他の価値を認め、尊重する関係づくり」「地域ぐるみの多文化共生社会づくり」という項目の中で述べられています。

ニューカマーの子どもたちと

～子どもに期待し続ける～

日本語がほとんど理解できない子どもに、教職員が試行錯誤を繰り返しながら関わりつなげていった実践があります。そこには、積極的に信頼関係を築こうとしている姿があります。そして、その教職員の姿を見て他の子どもたちも「自分たちでも何かできることはないだろうか」と考え始めます。そのような取組の中で、子どもたちの中に相互の学び合いが生まれ、一人ひとりに、困難なことに対しても立ち向かおうとする力が育っていきます。

「外国人だから仕方がない」とか、「日本語が分からないから無理じゃないか」とか、自ずと制限をつくってしまっていることはないでしょうか。

子どもたちの可能性に期待し続けることは私たちの責務でもあるといえます。クラスの中で子どもたちがつながり、ともに学んでいくための方法を探し続けていくことが必要です。



人権教育ガイドラインでは、「自他の価値を認め、尊重する関係づくり」「進路を保障する取組の推進」という項目の中で述べられています。

～わかりやすい授業を創る～

子どもの日本語習得状況に応じて国語教材をリライト（書き直す）し、それを個別指導の中で活用するなどの手だてがあります。リライトにかかる作業は、教職員がわかりやすい授業をいかに工夫するかということにもなります。

日本語習得のための個別指導は、最終的に教室でなかまと学ぶために行うものであって、そこへ行くためのひとつの手だてに過ぎません。教室でなかまとともに学ぶことを目標として大事にしていく必要があります。



人権教育ガイドラインでは、「学力を保障する取組の推進」という項目の中で述べられています。

～思いを伝える仲間づくりが個々のアイデンティティを育む～

「外国人中高生交流会」の場で、実行委員の高校生が「困ったことや悩み事、色々な問題にぶつかることはあると思うけど、自分独りでため込むのはやめよう。黙ってあきらめてしまうのではなくて誰かに伝えよう。わかってくれる人はいる。あきらめないでやっていこう」と語りました。

子どもたちが困難や差別に立ち向かい、自分らしい生き方を見つけていこうとするとき、同じ思いのある子ども同士がつながっていく活動がとても大切です。

そのような活動を組んでいくことで、子どもたちが、自分の思いを伝えることのできるなかまがいるという安心感をもち、未来に対して自分を肯定的に模索し始めるのではないのでしょうか。



人権教育ガイドラインでは、「自他の価値を認め、尊重する関係づくり」という項目の中で述べられています。

Ⅲ 実践事例を通して

※ 県内・全国における人権教育の実践研究・協議を経た報告事例を基に構成しました。報告や協議内容等は原文を尊重して編集しています。

事例① 子どもの思いを知ることから

「友達の願いに自分を重ねて」

津市立千里ヶ丘小学校のレポートより

【実践の概要】

「通訳がほしい」「運転免許がとりたい」など、子どもが綴る作文の中から、外国につながる子どもや保護者のおかれている厳しい現実が見えてきた。外国につながる子どもの母が厳しい現実の中で生活する姿に一人ひとりの子どもが自分のくらしを重ね、その生き方を学ぶ取組を通して、子どもたちはつながっていった。

実践者の振り返り

自分たちの取組を改めて振り返ったり立ち止まったりする中で、外国につながる子どもや保護者が今日置かれている現実に対する私たち自身の認識の甘さを見直すことができた。

また、「先生は、なぜ子どもに自分の生活を言わせるのか。」という言葉。自分の生活を語らせることだけがゴールではないと思いながらも、子どもたちが自らの生き方について、展望をもって考えていける取組に至っていないことに改めて気づかされた一言であった。この言葉を胸に、これからも今の自分・過去の自分を問いかけながら子どもたちと日々向き合い、ともに成長していきたい。

学びの視点

外国につながる子どもたちが日本での生活の中で感じている生きにくさは、日本の子どもたちが感じている生活の中での生きにくさとも重なる。ともに悩み考え、そして行動するなかまとしてのつながりをつくることの大切さ。

※ 報告の原文は第 61 回全国人権・同和教育研究大会報告書集及び記念誌に掲載されています。

事例② ～「ちがっていてあたりまえ」をあたりまえに～

「思いを伝えたくて ～人権フォーラム実行委員会の活動を通して～」

松阪市立殿町中学校のレポートより

【実践の概要】

ブラジル生まれのAは、いじめが原因で、同年齢の友だちがいないまま、大きな心の傷を抱えて校区外から中学校に入学してきた。校内人権フォーラム実行委員会の仲間と出会い、お互いを認め合いながら人権劇「思いを伝えたくて」を創り上げていくなかで、Aはフォーラムの仲間とつながり、成長していく。

実践者の振り返り

Aは、いろいろな人との出会いを通して、なかまとつながる喜びを実感し、自分を語ることでたくましさを身につけ、高校に進学していった。

今後も、フォーラムの活動を充実させていくとともに、小学校、高校との連携をさらに深めていく必要がある。

学びの視点

「ちがい」を認め合い、「ちがい」から学び合うことで、一人ひとりの「ちがい」を豊かさに変えていく子どもたちのつながり。

※ 報告の原文は第62回全国人権・同和教育研究大会報告書集に掲載されています。

事例③ 思いを伝える仲間づくりが個々のアイデンティティーを生む

「みんな一人じゃない。なかまがいるんだ！
～伊賀地区外国籍高校生交流会の取り組みを通して～」

県立上野農業高等学校のレポートより

【実践の概要】

日本語学習の支援が必要な状態で入学してきたMは、必死に日本語の習得に努め、日本の言葉や文化に適応しようとしていた。外国籍の高校生たちをつなげることを目的に開催された「交流会」の実行委員として、回を重ねる毎に周りを巻き込んでいった。報告者は、自分に自信を持ち、母国にも誇りをもつ M の内面に次第に気づいていった。

実践者の振り返り

自らの実践を振り返り、レポートにまとめていくことは、私にとって貴重な時間となった。レポート学習会で一緒になったメンバーからの指摘や助言を通して、Mとのやりとりを思い出し、自分自身を振り返ることができた。

また、「子どもにとって何が必要か」「どんな子どもに育てたいか」など、ねらいをしっかりと持ち、しかけていくことで、子どもたち同士のつながりや、自主的な活動や組織をつくっていくことが大切であることを再確認できた。

学びの視点

多様な文化的背景を持つ子どもたちが、お互いを認め合い、ともに輝けるための、子どもたちの主体的な活動や私たちができる支援のあり方。

※ 報告の原文は第 61 回全国人権・同和教育研究大会報告書集及び記念誌に掲載されています。

事例④ 子どもの姿を見続ける

「日本で学びたい！ 学ばせたい！」

松阪市初期適応支援教室「いっぽ」のレポートより

【実践の概要】

「いっぽ」とは「初めの一步」の意味。日本へ初めてやってきた児童生徒が安心して生きていくために必要な日本語や生活習慣・文化についての学習を支援している。いろいろな国から来た子どもたちが、それぞれの国の文化なども大切にしながら、ともに学んでいる。

実践者の振り返り

「日本語がわからないのでこわい。」と小さくなっていたBさんが「今は、日本語でいっばいしゃべる。外国から来たので、日本語をまちがえても当たり前。教えてくれるから大丈夫。」と、いきいきと話す姿がある。在籍校でのお互いの違いを認め合うなかまづくりの成果でもあると考える。「いっぽ」は一時的な支援の場だが、在籍校と連携し、修了後の子どもたちの姿までしっかり見続けることによって、その役割がより明確になった。

学びの視点

外国人児童生徒一人ひとりが自分の将来を切りひらいていくための力をつけていくことに、どのような支援ができるのか。

※ 報告の原文は第61回全国人権・同和教育研究大会報告書集及び記念誌に掲載されています。

IV 教職員のスキルを高める5つのステップ

Ⅲの事例が示しているように、実践者が葛藤しながら気づいていくことが、次なる取組への活力になっていく様子がわかります。

明日からの自分（自校）の実践に向けて、次のことを参考にしてみてください。

ステップ1 気になる子どものことを書き出してみよう。



「気になる」子がどんな状況にいるのか

学校や家庭・地域の中で、その子どもはどんな状況にいるのかを書こう。
そして、「なぜ、その子が気になるのか」を考えよう。

ステップ2 概念や観念でなく、具体的に書き出してみよう。



具体的な子どもとのやりとり

教職員の類推や思いや願いだけを並べるのではなく、具体的な子どもの姿、言葉、作文（保護者の姿、言葉）などを中心にして書こう。



気になる子とまわりの子どもたちとのつながり

子ども同士の話の内容ややりとりを通して、具体的に書こう。

ステップ3 取組でのつまづきや躍動、葛藤や感動を、書き出そう。



自分のやってきたこと、やっていること

取組だけでなく、考えたことや悩んだこと、心配したことなどをきちんと整理しながら書こう。

ステップ4 取組後の子どもの変化を書き出してみよう。



「気になる」子がどんな状況にいるのか

「気になる」子とまわりの子どもたちとのつながりを子どもとのやりとりを中心にして書こう。

ステップ5 次の取組に踏み出すヒントを見つけよう。



書き上げたレポートを次の視点で再点検してみよう。

- ①子どもが自分らしく生きていくことを阻む課題が見えているか。
- ②その子や保護者の生活状況が見えているか。
- ③まわりにいる子どもたちやおとなの思いをつかめているか。
- ④子どもの実態から教育の課題を見つけることができているか。

解説

子どもたちがどんなことに苦しみ、何に悩んでいるかを子どもの姿から明らかにしていくことが大事になってきます。子どもたちの抱えている思いが一人ひとり違うように、その背景にあるものもそれぞれ違います。そこに何があるのかをつかむために、学校外での子どもたちの生活を知る必要もあると思います。

また、具体的に書き出すためには、一人ひとりの子どもとじっくり対話していくことが大切です。また、学校外での子どもたちの生活についての、保護者との対話も必要です。

まとめた実践について、ぜひ、多くの人に意見を求め、協議していくことが大切です。新たな視点や気づかなかった観点到に気づいたり、今悩んでいることが解決したりすることも多いものです。

最後に、必ずこのステップどおり進めなければならないわけではありません。
あなたが取組に向けて踏み出し、葛藤した時こそ、スキルを高めるチャンスです！

V 寄せられる質問から

～私の学校で進める多文化共生教育とは～

Q1 近年日本に来た子どもたちは、言葉や文化、生活習慣などが違うので、いろいろな支援が必要なのはよくわかります。でも、在日コリアンの子どもたちはみんなと変わらず生活しています。あえて言わなければ外国人であることもわかりません。そんな在日コリアンの子どもたちにも、私たちが考えていくべき課題はあるのでしょうか？

在日コリアンの子どもたちの中には、自分がコリアンであることを明らかにすることで友だちが離れていくかもしれないといった不安を抱く子どもがいます。そして、そのことにより本名を名のれない場合も少なくありません。その結果、コリアンであることをマイナスにとらえ、自尊感情がそこなわれてしまうことさえあります。そのような状況の中で、近年日本に来た子どもの中にまで、日本語が話せるようになると、外国人であることを隠して生活しようとする子どもが出てきています。

在日コリアンをはじめ、すべての子どもたちが、自らのアイデンティティーを確立し、自分を隠す必要なくあるがままに生きることができるような環境にしていけるために、取組を進めなければなりません。

他にも、進路保障に関わる国籍条項の問題など、数々の課題が山積しています。在日コリアンの子どもや保護者の思い・願いを知ることで、それらの課題は見えてくるでしょう。

Q2 ちがっていることを理由にからかったりいじめたりすることは絶対許したくないと思い、「ちがっていてあたりまえ。ちがいを認め合おう」と学習をすすめてきました。でも、「ちがいを豊かさに」という言葉を聞きました。これは、どういうことですか？

外国人か否かという違いだけでなく、人はもともと一人ひとりが個性をもっています。体験してきたことや、感じ方・考え方なども、それぞれが違います。たとえば、外国人の方から、どんなことに困って、どんなことが嬉しかったかを聞かせてもらうことで、みんなが安心して生活するために何が必要かを学ぶことができます。それまでは当たり前としか感じなかったことも、異なる考えや感じ方を知ることで、立ちどまって考えてみるきっかけになることもあります。それぞれの体験から感じたことを出し合うことで、たくさんのことを学ぶことができたり、新しい発想が生まれたりします。

一人ひとりの存在が大切にされ、自分らしさが発揮できること、それが「ちがいを豊かさに」ということではないでしょうか。

Q3 多文化共生教育の取組と同和教育が取り組んできたことの共通点は何ですか。

同和教育では、子どもが見せるいろいろな姿を、その生活背景や地域の実態とともにとらえることによって、子どもや保護者の願い、そして、それらが差別等により妨げられていることを明らかにしてきました。そして、願いの実現を阻んでいるものを取り去り、子どもが自ら将来を切り拓いていく力を身につけるための取組をいろいろな角度から実践してきました。

外国につながる子どもが時として無気力な姿を見せることがありますが、同じようにその背景をとらえていくと、そこには多文化共生を阻むものがあり、私たちが取り組むべき教育課題が見えてきます。

同和教育で大切にしてきたこと、実践してきたことは、すべて、多文化共生教育の中でも活かすことができるという良いでしょう。

Q4 初期適応指導を終えたもののまだ十分には日本語が話せない子どもが転入してきました。巡回相談員さんは週に2回来てくれますが、外国につながる子どもの転入は初めてで、日本語教育を担当する教員もない私の学校で、どんな支援ができるのか不安です。

その子自身も、まだまだ不安がいっぱいでしょう。その時に、何よりも大きな力になるのは、そこで自分が受け入れられていると実感できることです。教職員が、汗をかきながら一生懸命何かを伝えようとする姿を見て、子どもは自分も日本語の勉強を頑張ろうとします。言いかえれば、まず私たちが、その子どもたちを受け入れようとするのが大切です。また支援が必要な子どもに少しでもわかりやすい授業をと工夫することで、他の子どもの学力や学習に向かう姿勢が向上したという経験を持つ教職員もいます。

また、教材や指導方法の工夫などは、先進的に取り組んでいる学校や教育委員会等に相談し、必要な情報を得ることも大切です。